

史料保存技術室報告

史料編纂所蔵模写本「立花宗茂画像」「蜷川親直画像」補彩報告

村岡ゆかり

はじめに

二〇二〇年九月、本所所蔵模写本「立花宗茂画像」および「蜷川親直画像」の絵具層剥落部分の修補が修理室でなされた後、補彩処理を施した。

虫損や剥落部分の修補が行われた作品の中には、欠損部分が際立ち、原本の印象が損なわれるものがある。そのため、修補箇所を目立たなくする目的で、補彩が行われる場合もある。通常は、欠損部分に料紙を補填した後、主に描画外の背景などの経年色を塗ることが多い。補彩を行う場合、補彩箇所の周囲にまで絵具が浸透して広がるなど、原本の状態を変えてしまう可能性もあるため、原本に影響が及ばないよう慎重に作業する必要がある。

今回行った補彩の対象は本所所蔵の模写本であることから、原本への補彩とはその目的が若干異なる。模写本は、原本の様態を記録する目的で作成されるものであるが、模写後に生じた欠損部分が原本情報の正確な把握を困難にすることもある。模写本への補彩は、模写制作の継続という側面だけでなく、模写制作当初の様態を蘇らせることで、模写本来の機能や価値を維持することに繋がるのである。

一、「立花宗茂画像」模写本（波五二）について

原本は高野山大円院が所蔵し、寛永二十年（一六四三）賢鉄彦良の賛がある。明治四十二年（一九〇九）の『史料編纂掛備用写真画像図画類目録』に載るので、これ以前の模写である。大円院の文書は明治二十二年に影写されている。

この模写本は、粒子のある顔料の使用が少なく、染料系の絵具を多用している可能性が高いように思われる。顕微鏡観察を行ったところ、緑色は薄い

緑と透明な粒子が混在していた。また青色は不純物が多く、青い鮮やかな粒子がある。これらはいずれも天然の顔料とは異なる質感であると推定される。これらから、模写本制作者は主に携帯用絵具である顔彩を含む絵具を使用したと推定し、作業にあたっては、藍色は藍棒、黒色は墨、緑色は藍と藤黄、その他背景や袈裟は顔彩を使用した。図1は、補彩前の画像で、赤い丸で示した部分が補彩箇所である。賛に書かれている文字の欠損部分は、墨をもって補い復元した。主な補彩箇所の補彩前後の拡大写真を、表1・表2として示した。

二、「蜷川親直画像」模写本（波一〇九）について

この模写本は画面左下の落款から、明治三五年（壬寅、一九〇二）六月、草川重達（写字生）によって制作されたとわかる。全体的に繊細な線で描かれており、淡い色調の彩色である。

肉眼観察の限り、染料系絵具を使用していると推定される。さきの「立花宗茂画像」と同様、彩色の多くは携帯用絵具である顔彩を使用したと推定され、作業にあたっては、緑色は藍棒と藤黄の混色、青色は藍棒、黒色は墨、その他の背景色・衣・袈裟は顔彩を使用した。なお、背景部分は彩色がないため、補彩は行っていない。図2は、補彩前の画像で、赤い丸で示した部分が補彩箇所である。賛の欠損した部分（図2①）の文字の復元作業も併せて行った。図2③の数珠を持つ手、図2④の足は、墨線も補完した。表3は、主な補彩箇所の前後の拡大写真を並べて示したものである。

おわりに

修理前の「立花宗茂画像」および「蜷川親直画像」模写本には、いずれも多くの虫損箇所が認められた。本所所蔵の同時期の模写本は、これらと同様に劣化が進んでいるのではと危惧される。模写本の中には、原本が失われたのち、原本情報を今に伝える貴重なものも多い。劣化により、そうした原本の情報が失われることを防ぐ意味でも、今回のような補彩作業は必要であろう。今後も随時対応をしていきたいと思います。



図1 「立花宗茂画像」模写本 補彩箇所

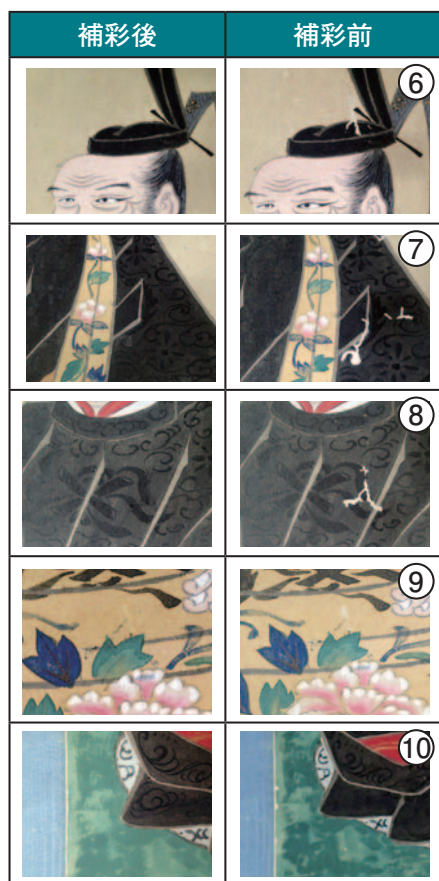


表 2

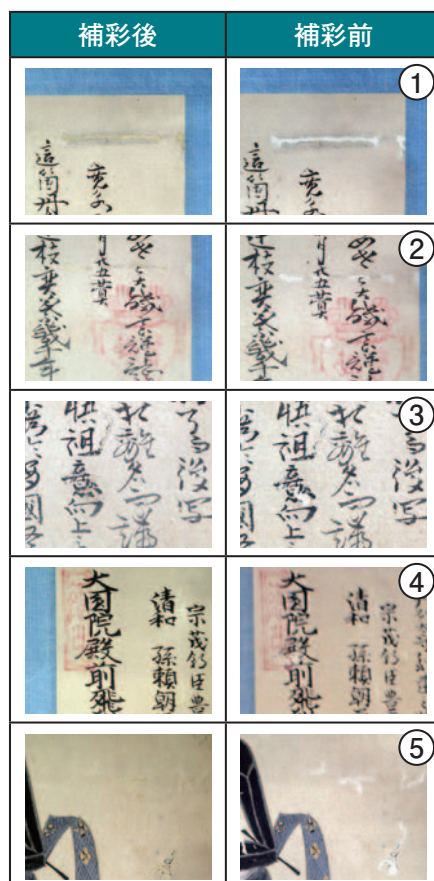


表 1

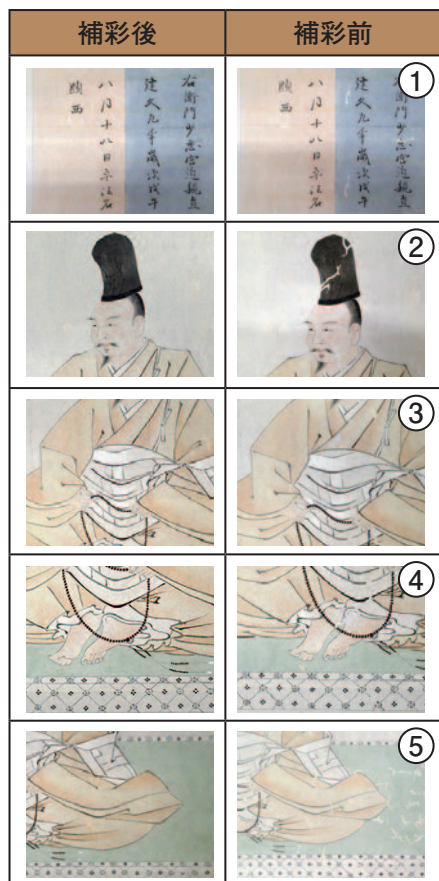


表 3

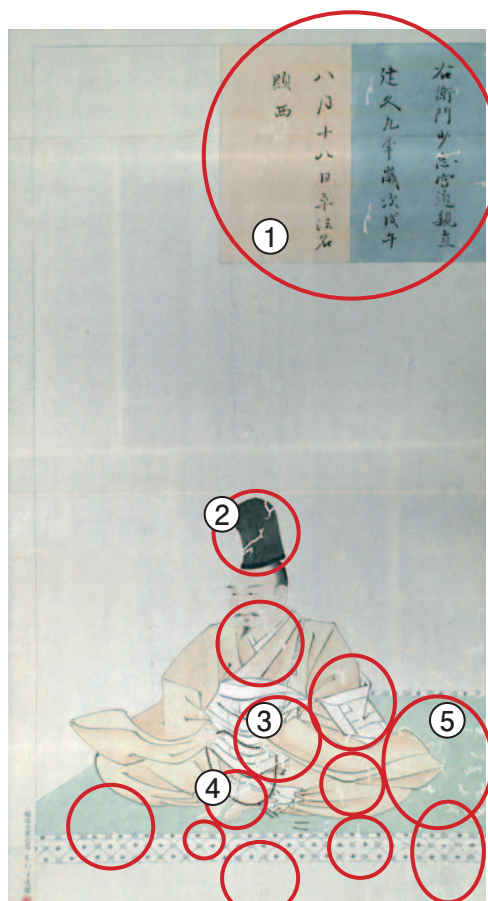


図 2 「蜷川親直画像」模写本 補彩箇所